



ながおく 永送り

はじめに

石橋文化が栄えた九州地方の中でも、鹿児島市の甲突川に架けられた西田橋をはじめとする5つの石造アーチ橋梁は名橋の誉れ高く、平成5年(1993)の洪水で2橋が流出したものの、西田橋、高麗橋、玉江橋の3橋が県立石橋記念公園に移設されています。

これらの橋を架けたのは、岩永三五郎という熊本県野津村(現在の八代郡木下町)の石工で、今西祐行氏の児童文学『肥後の石工』の主人公にも取り上げられます。



西田橋(石橋記念公園内) 2019年撮影

さて、この岩永三五郎について、近年刊行された『日本と世界の土木遺産』(平成29年)などを見ると不思議なことが書かれています。

「仲間の石工と鹿児島島に向いた三五郎らは、甲突川の石積み護岸工事とともに西田橋など5石橋すべての架設を行った。帰国を許された岩永三五郎らには、秘密漏えいを恐れた薩摩藩より刺客がはなれたという。」

山口祐造氏の著述

薩摩藩のために尽くした三五郎を、なぜ刺客を放つて殺さなければならなかったのか。例えば山口祐造氏は、その著書である『九州の石橋をたずねて』(昭和50年)、『石橋は生きている』(平成4年)などでおおよそ次のように説明しています。

「薩摩藩の家老調所広郷は、河川の改修や道路の建設、海岸埋立等の発展を図った。そのころ、肥後の八代郡に岩永三五郎という優秀な石工がいると聞いた。調所は八代藩に再三使者を送り、三五郎招聘を懇請した。①そして、天保10年

す。それには、三五郎のことが書かれており、「清熙が辞職して間もなく、岩永も帰国したり。始めて来りしより嘉永二年迄、八九年間藩内残る所なく工事を修め、大に永遠の工基を興したり」と、当然といえば当然ですが永送りの記述はありません。

古老の伝

早い時期に永送りの記述が見られる資料には、大正2年(1913)の『鹿児島県見聞記』があり、それには「熊本県人岩永三五郎設計者は阿蘇鐵矢、何れも此橋(西田橋)が竣成すると国境まで送られて二人は斬られたのだと、今も年老ひた人の口から伝へている。」とあります。ここでは三五郎は殺されており、それはいわゆる「古老の伝」と書かれています。

しかし、「古老の伝」は、決して盲目的に信じてはいけません。例えば、見聞記では三五郎の他に阿蘇鐵矢という人物も斬られたことになっています。彼は薩摩藩の大工頭で、三五郎を補佐した人物ですが、明治19年(1886)まで85歳の長命を保ったことが確認されています。

三五郎については、薩摩を去った後の消息が明らかでなく、そこで暗殺されたような伝承が生まれたのでしようが、菩提寺である野津の東光寺の記録などから嘉永4年(1851)に59歳で故郷にて亡くなったと考えられています。つまり「鹿児島県見聞記」の古老の伝は、一つも真実を伝えていないのです。

子孫の伝

山口氏が著した三五郎一代記の出典は明記されていないのですが、『石橋は生き

(1839)、三五郎は一族を引き連れて、鹿児島へと赴いた。

しかし、天保14年頃から藩内の内紛が高まり、反家老の勢力が強くなってきた。そうなる、家老の信頼が篤かった三五郎達の身辺に、永送り(暗殺)の風評が立ち始めた。甲突川の石橋等、戦略上の秘密を手掛けているので当然であろう。②昔は紀伊、加賀、薩摩の三国で永送りの掟があったそうである。

一族の危機を察知した三五郎は、若い甥たちを故郷の家族の病氣などを理由に一人また一人と熊本に帰した。③

弘化3年(1846)になると、三五郎が精魂を傾けた西田橋が完成し、右腕として残っていた弟の三平を帰すことにした。しかし、追手が差し向けられ、三平は片腕を切り落とされた。④

三平は国境を越えて津奈木村に辿り着き、そこで傷を癒した。そして世話になった村人へのお礼にと、津奈木重盤岩眼鏡橋を架けた。⑤

嘉永2年(1849)、三五郎は最後の仕事を終えると帰国の途についたが、予想通り追手に囲まれてしまった。しかし、



玉江橋(石橋記念公園内) 2019年撮影

ている」の本文中に子孫からの伝聞だとわかる記述があります。

「子孫の故橋本辰記氏が三五郎や種山一族の業績を世にだしたいと努力していた。三五郎の甥橋本勘五郎丈八(通潤橋)を架けた名工の孫にあたるので、祖父から伝え聞いた業績や書類などから種山石工の働きは肥後の歴史を飾る環だと信じて資料を集め…」

血縁はない

ここに言う橋本勘五郎丈八は実存の人物であり、熊本で実績を積んだ後に明治政府に招かれ、東京で万世橋や浅草橋を架橋しています。山口氏の著述でも、三五郎の甥として紹介され、ともに鹿児島に赴いたと書かれています。

しかし、実は岩永家と橋本家は全く別家系で血縁がないことが、ほぼ確かめられています。つまり、山口氏に口伝や書類を伝えた橋本辰記氏は、岩永三五郎の子孫ではないこととなります。

もちろん、同じ熊本八代の石工仲間として交流があり、三五郎の事跡も詳しく伝

暗殺隊の隊長は、三五郎の立派な人格を惜しみ、見逃してくれた。三五郎は「必要があれば、いつでも私の首を取りに来てほしい」と言い残して去った。暗殺者たちは、その帰りに三五郎によく似た渡世人の首を取り、代わりに持ち帰った。⑤」

疑問点

かなり要約しましたが、以上が山口氏の語る暗殺の顛末です。ちなみに、山口氏は諫早市の土木技術者として九州の石橋に接することとなり、研究と保存運動に半生をささげました。彼の著述は中学校の教科書に採用されるなど、後の石橋に関する著作や研究に大きな影響を与えています。

しかし、この要約だけ見ても、内容にかなり疑問があります。要約文に付けた番号に従って見てください。

① 他藩に招聘を懇請した技術者を暗殺するのは、さすがに外交上大問題となるのではないかと。

② 橋を架けたり、護岸工事をするのが、暗殺するほどの秘密を抱えることになるのか。

えられていたかもしれませんが、そもそも家系も間違っていたことを考えると、どの程度の信憑性があるのか大いに疑問です。

おわりに

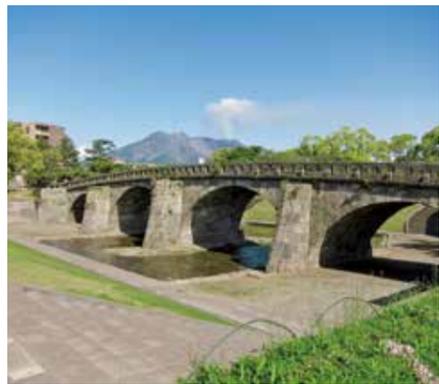
山口氏は、橋本辰記氏からの伝聞をもとに、自身が修理に携わった諫早眼鏡橋の解体移築報告書「重要文化財眼鏡橋移築修理工事報告書」(昭和36年)(以下、『報告書』)に不確かな岩永家系図を載せ、その後には三五郎の一代記を著述しました。そして、それは史実として受け入れられ、現在に至っています。

三五郎の事跡を研究した蓑田勝彦氏は、山口氏の著述について「著者が工学関係者であることもあって、歴史的事実に関する部分については、資料による検討はほとんどなされておらず…」と断じています。確かにその通りですが、私は加えてある意図があったのではないかと考えています。

要約文の④について、『報告書』を読むと三平が津奈木村にて傷を癒した云々は、橋本氏からの伝聞にはなく、山口氏が創作したことがわかります。それはこの箇所に限ったことではないでしょう。

山口氏が初めて甲突川の5橋を目にしたころ、石橋は都市計画に無用だと撤去する動きがあり、彼はそれを知って保存運動にまい進することになりました。山口氏は石橋の素晴らしさを訴えるため、橋自体もさることながら、石工である三五郎についても、橋本氏からの伝聞などを脚色し、人々の興味を引くような波乱万丈の物語を生み出したのではないのでしょうか。

(文：江口知秀)



高麗橋(石橋記念公園内) 2019年撮影

か。例えば三五郎が薩摩にいた当時、直接の上司となった海老原清熙が、明治17年(1884)に記した『薩摩天保度以後財政改革顛末書』という記録がありま

海老原清熙

まず永送り云々の出どころとは何なのか。例えば三五郎が薩摩にいた当時、直接の上司となった海老原清熙が、明治17年(1884)に記した『薩摩天保度以後財政改革顛末書』という記録がありま

③ いくら理由を付けたからとはいえ、暗殺対象をやすやすと帰してしま

うものなのか。

④ 「おわりに」にて後述。

⑤ どうして、そのようなことが伝わるのか。まさか、暗殺者が「いやーおいどん、三五郎さんを殺すことはできません、身代わりをたてたでござす」などと吹聴したわけでもあるまいに。

などなど、数え上げればきりがありませんが、なにより全文を通して見てきたような書きっぷりが気になります。そうしたものは後世の創作の可能性が高いのです。(例えば、「けんせつのでんせつシリーズ68 早苗地蔵伝説の由来」を参照。当館ホームページで閲覧可能です)

海老原清熙

まず永送り云々の出どころとは何なのか。例えば三五郎が薩摩にいた当時、直接の上司となった海老原清熙が、明治17年(1884)に記した『薩摩天保度以後財政改革顛末書』という記録がありま